

「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」は、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(2007～2009年度)、「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」(2010～2012年)の両プロジェクトを継承し、2013～2015年度の3年計画で実施中のものである。以下では、本プロジェクトの2年目となった2014年度の成果を紹介した後、最終年度となる2015年度の計画について概要を示す。

本プロジェクトの事業内容には、主に二つの柱がある。一つは、2009年から本格運用が開始された「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)について、研究開発推進機構内の諸機関や図書館等と連携をはかって円滑な運営を行い、改善を進めることである。もう一つは、本プロジェクト独自の調査研究の展開と、それに基づいたデジタル・コンテンツの拡充である。

また、本プロジェクトでは、教育活動への活用・還元という点を重視し、これを前掲の二つの柱の双方に適用しながら、事業を展開してきている。特に、後者の独自のコンテンツ作成の面では、宗教文化に関する教育のための教材作成に力を入れている。この点については、「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担っている「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク、本研究所内に設置)との緊密な連携を取りながら進めていくものである。

2014年度の本プロジェクトメンバーは以下の通りであった。

責任者 井上順孝

分担者

専任教員：平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高、鈴木聡子

兼任教員：ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、齊藤こずゑ

客員研究員：李和珍、市川収、カール・フレレ

PD研究員：加藤久子

研究補助員：天田顕徳

客員教授：ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘

共同研究員：イヴ・カドー、ヤニス・ガイタニディス、キロス・イグナシオ、市田雅崇、今井信治、小堀馨子、野口生也、藤井麻央、村上晶、山梨有希子

2. 2014年度の成果

(1) 「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

各種のデータベース・事典等をウェブ上で総合的に検索・閲覧・利用できるデジタル・ミュージアムは、基本的部分についてはすでに確立されているため、さらなるユーザー目線からの使いやすさの改善とコンテンツの充実に力を注いだ。

機構内他機関の担当者、システム担当者、ソフト提供会社の担当者、図書館・機構事務課・広報課等とともに、「デジタル・ミュー

ジウム・ワーキンググループ」会議を年度内に5回開き、課題の共有と改善案の検討を行った。

特に2014年度は、國學院大學博物館が中心となった、「平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」」が採択され進められた。そのなかでは、本デジタル・ミュージアムの占める位置と役割も大きかったため、連携・連絡を密に行った。

デジタル・ミュージアムのサイトに関しては、2014年度には、データベース数の増加（現在25種公開）に対応して、トップページのメニューバーの改善が行われた。

教材開発の推進の観点からは、スマートフォンアプリを活用したコンテンツ公開・発信がなされた。地図アプリ「ロケスマ」（デジタルアドバンテージ社）のフォームを活用し、デジタル・ミュージアム関連のデータベースに基づくあるいは関連した「神社絵葉書」「水郷佐原」「重要伝統的建造物群保存地区」のマップが、「全国神社」データベースに加えて公開された。

(2) プロジェクト独自の調査・研究等

◇国際研究フォーラム「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジャー」の開催

2014年9月27日（土）には、國學院大學 学術メディアセンター1階常磐松ホールにおいて、本研究所の主催、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」ならびに宗教文化教育推進センターの共催によって、国際研究フォーラム「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジャー」が開催された（本号「2014年度のトピック1」を参照）。

同フォーラムでは、4名の発題とコメント、討議が行われた。発題者とタイトル、コメン

テーターは以下の通りである。

・第1セッション

高橋徹氏（株式会社ATR Creative）「地域文化の発見的伝承—スマートフォン時代の文化資料デジタルアーカイブの活用—」

・第2セッション

上西亘氏（國學院大學）「神道・神社博物館の課題と展望—インターネットを中心とした博物館情報・メディア構築について—」

・第3セッション

アラン・カミングス氏（University of London, UK）「日本文化史の授業とミュージアム—大英博物館の場合—」

・第4セッション

サミュエル・モース氏（Amherst College, USA）"Religious Art, the Museum, and the Digital Age"

・コメンテーター

牧野元紀氏（公益財団法人東洋文庫）

・司会

井上順孝（國學院大學）

宗教文化を教育・学習する際にミュージアムやデジタル情報技術をどのように活用できるかについて、活発な議論が交わされた。

なお、国際研究フォーラムは、2008年度より毎年開催されてきているが、2014年度にはそれ以前の会議の内容の概略を紹介した『国際研究フォーラム報告書2008～2013年度』が刊行された（本号「出版物紹介」を参照）。

◇EOSの拡充

2014年度には、英文のオンライン神道事典 Encyclopedia of Shinto (EOS) の充実・改善作業が進められた。アップロード済みの本文内容をチェックし、統一性・整合性を確保する作業については、年度を通じて継続的に実施された。

神道事典の付録に収められている年表の英訳も、簡易版・詳細版がともにアップロードされ、利用に供された。

神道事典の韓国語訳については、「第4部 神社」に続き、「第8部 流派・教団と人物」のオンライン公開が行われた。また、これに基づき『神道事典』の韓国語版抄訳『신도사전 (초역)』(本号「出版物紹介」を参照)が書籍として刊行された。

◇双方向論文翻訳

本プロジェクトでは、神道・日本文化に関する研究を国際的に発信するため、また海外の研究を日本に紹介するために、日本語から外国語、外国語から日本語への翻訳を行って、ウェブで公開する事業を進めてきた。

2014年度には、次の3論文類を選定して翻訳を行った。日本語から英語へのものが1点、英語から日本語へのものが2点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文類

宗教情報リサーチセンター『「神社組織に関するアンケート調査」報告書』(英訳 Questionnaire Survey Report on Shinto Shrines 翻訳者: FRIEDRICH, Daniel)

・英語から日本語へ翻訳された論文

ZHONG, Yijiang, "Freedom, Religion and the Making of the Modern State in Japan, 1868-89" (邦訳: 日本における自由・宗教・近代国家形成—1868年から1889年まで—) 翻訳者: 富澤宣太郎)

GAITANIDIS, Ioannis & MURAKAMI, Aki "From Miko to Spiritual Therapist: Shamanistic Initiations in Contemporary Japan" (邦訳: 巫女からスピリチュアル・セラピストまで—現代日本における入巫儀礼—) 翻訳者: 黒田純一郎)

◇教派神道・神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

本研究所には、神理教や神道修成派を中心

とする教派神道や神道系新宗教に関する文書資料が所蔵されており、デジタル化が進められてきている。また、デジタル・ミュージアムのなかには、「教派神道関連資料データベース」がすでに構築されている。2014年度には、神道系新宗教関係のものを中心に公開のための準備作業が進められた。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築ならびに公開

宗教文化教育推進センター事業、ならびに前述の科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」と連携しながら、宗教文化の教育と学習に役立てられる現代宗教に関する資料・データの収集とデータベースの構築・充実化が進められた。

具体的には、すでに公開済の「博物館と宗教文化」「宗教文化を学ぶための基本書案内」「世界遺産と宗教文化」データベースの充実化の作業が中心的に行われた(宗教文化教育推進センターのサイト <http://www.cerc.jp/> を参照)。

なお、同科研による調査研究は2014年度が最終年度であったが、本研究所プロジェクトも関わったその成果の一部は、報告書『宗教文化教育の教材開発』として刊行された(本号「出版物紹介」を参照)。

3. 2015年度の研究計画等

◇「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

デジタル・ミュージアムの運営については、ワーキンググループ会議を定期的に関き、課題共有・意見交換を行う。

特に2015年度は、デジタル・ミュージアムを含め、各機関の成果や刊行物等にスムーズにアクセスできるよう、各機関・データベース・サイトの連携と管理に重点を置く。そのなかでは、研究開発推進機構サイトの英語版、ならびに掲載データベース全体の簡潔な説明

ページの構築を主眼に行っていく。

また、2015年度は前年度の同種事業に続き、「文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」」が採択された。同事業を構成する柱のなかには、「博物館における多言語サービスの充実」「日本文化研究拠点の国際連携」等があり、本プロジェクトにて培われてきたコンテンツとノウハウの活用が求められる。同事業とも綿密に連携を取って事業を進めていく。

◇EOSのチェックと改善

EOS本文内容のチェックは継続し、表記の統一性等について改善をはかっていく。

英文年表詳細版については、冊子での刊行準備と広報を進め、教育・研究への活用を求める。

韓国語訳「第4部 神社」「第8部 流派・教団と人物」の文字表示の点検・改善も進めていく。

◇双方向論文翻訳

神道ならびに日本文化に関する論文の双方向翻訳については、従来のように継続し、論文を選択し翻訳を予定している。

また、ウェブ上での閲覧・利用の方法等についてもアクセスしやすいように、サイト構成に関しての改善を進める。

◇教派神道・神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

2015年度は、教派神道連合会の前身である神道同志会の1895（明治28）年の結成から120年目にあたるため、各教団とも連携を取りながら、デジタル・ミュージアム内の「教派神道関連資料データベース」のコンテンツ充実化に取り組む。

◇教育への活用の重視

宗教文化教育推進センターと連携を継続して、教材作成を進める。具体的には動画教材の作成・公開、宗教文化の学習に活用できる映画・世界遺産・博物館・参考文献等に関するデータベースの拡充と点検、前述のスマートフォンアプリを活用したコンテンツの整備と公開等である。また、2015年11月15日に第9回が実施予定の宗教文化士認定試験（第8回は6月28日に実施済み）事業等にも協力していく。

あわせて、「宗教と社会」学会の「宗教文化の授業研究」プロジェクトとも連携し、授業研究会を継続して行う。

◇「学生宗教意識調査」報告書の刊行

「宗教と社会」学会の「宗教意識調査」プロジェクトと共同で「第12回学生宗教意識調査」を実施する。これは数年に一回の頻度で、これまで毎回4千人超の大学生を対象に行われてきたものである。この調査の実施と回答の集計を行い、報告書を刊行する。

なお、この形式による意識調査は今回で最後となる。1995年以来20年にわたって実施されてきたので、学生の宗教意識の変化等を探る上で他に類を見ない非常に貴重なデータとなる。

◇国際研究フォーラム等の開催

2015年度は、本研究所設立60周年を記念して「「日本文化」研究の展望」というテーマで、10月24日（土）・25日（日）に公開学術講演会と国際研究フォーラムを連続して開催する。また、前掲のミュージアム連携事業のなかでも、12月に「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」と題した国際シンポジウムを開催予定である。どちらも本プロジェクトのあり方にも関わる内容であり、国際的な研究ネットワークが一層進展することが期待される。